

でも私の脳裡から離れなかった。

青く澄んだ空、ぼっかり浮んだ白い雲の中に、ふと私の母の顔が浮んだ。ようやく心に平和がよみがえった。私は疲れた。このまゝ眠り続けたい。

水葬

翌三月二日、戦死者の水葬を行なわれた。

昨日の対空戦闘で、乗組員二十三名が戦死、十九名が重傷を負った。乗組員一同甲板上に整列、元和尚さんだった機関兵がお経を唱い、供物が並べられ、戦死者を見送った。遺体は全く無傷の者、下半身のない者、首のない者、さまざまである。副艦長松本大尉以下二遺体を頭と足を互い違えに並べ、毛布で包み、ロープでしばり練習用砲弾をくくりつけて、艦尾から海中に投じた。軍艦旗の下から白い飛沫がぱつと上るたびに胸がぎゅつきゅつとしめつけられた。

艦は、最後の別れを惜しみ、その周囲を二度三度廻った。乗組員は、黙禱を捧げていた。

艦は二十ノットの速度で北上した。敵の偵察機が飛来しても、潜水艦が探知されても、「戦闘用意」はなく、逃避するのみであった。

半数に減った乗組員は、二十四時間配置となっていた。

動けぬ戦死者は、第三分隊の兵員室に寝かされた。

私はこの二日間、複雑骨折した足下部の激痛に、不眠が続いていた。

軍医は、将校一名、看護兵二名で、受傷個所にヨーチンを塗布するにすぎない、早くこの足をどうかしてくれと叫んだ。

大腿部を骨折し、隣りに寝ていた佐藤上水は、昨日から急に衰弱し、唸り声も小さくなり、額に油汗をにじませ、今朝明け方死んだ。

佐藤上水は、すぐ毛布に包まれ、荷物のように上甲板に運ばれていた。戦争の恐ろしさを、この時程強く感じたことはなかった。

艦上は狭いので、戦死者や受傷者がいると戦闘ができないので、戦死

者は直ちに海中に投じられ、負傷者は一箇所に片附けられ、所属分隊で食事を運ぶ事になる。継子扱いはされるのだ。私は毛布で顔を覆い、うち震えた。

夢遊の旅

艦内での治療は、一日一回包帯交換があり、受傷患部に赤チンキ塗布にすぎなかった。受傷者は毎夜襲いくる患部の激痛に悩まされ、負傷した手、足を切断してくれと泣き叫んでいた。

戦死者の水葬が終ったその夜、私は高熱を出し、人事不省に陥いった。植物人間の状態で、自分の意識はなかった。明け方になって、漸やく意識を取戻し「日本からこんなに遠く離れた南海で死にたくない」このことばかり意識の中にあつた。

待望の入湯上陸が許可された。

陸にあがると、すぐ靴をぬぎ捨てた。素足で土の上で歩きたかった。故郷の土の匂いがぶんぶんする。無性に故郷が恋しい。

私は歩いた。どこまでも歩いた。澄み渡る青空、緑の草原をどこまでも歩いた。時々野兎のようにびよんびよん跳ねながら歩き続けた。

口笛がでる、海軍では口笛を吹くのは絶対禁じられていたのだ……。私は、この道は故郷に通ずる道と、心に決めていた。大きな池があつた。泉がコンコンと湧き出ている。真水だ。そういえばここ二週間ほど顔を洗っていなかった。足の甲にも黒汁を流したような地図が描かれていた。艦内では、一日コップ三杯（三合）の真水が朝に配給される、口

を注ぎ、顔を洗い、ふんどしや靴下など小物を洗う水である。しかし、下士官が先に使い、兵が使う頃には、オスタップの底は空っ

ぽになり、ゴミだけが浮んでいる。

夢にまで見る真水だ。水の上で生活しながら水に飢えているのだ。

私は顔をすっぱり水の中に入れた。

「アーア、アンズマス」と、思わず津軽弁が出てしまう。海兵団に入団して以来、津軽弁は一言も発していない。胸の奥底に隠していたこの懐かしい言葉に私は、思わず涙がこぼれた。津軽っ子の胸中には、やっぱり津軽弁が生きているのだ。

急に空腹を覚えた、と、抜根の上に銀飯がポカポカ湯気をたて、飯の上には真赤な大粒の筋子がのっているのではないか。しかもそばに、山盛りの白菜漬けもあった。艦の飯は、ねばり気のないサイゴン米に麦を入れ、凍った飯を熱くした味だ。白米など減多に食うこともなく、白米を銀飯という。漬物はカボチャを薄切りにしたもので、少しの水気もなかった。味もそっけもないとは、こんな味からでた言葉かも知れない。鱈腹食ったら眠くなった。このまま、何日でも誰にも干渉されずに眠り続けたい。「私は死んでもいい。疲れた。起さないでくれ、眠りたいのだ」しかし私の身体はいつまでもゆり動かされた。私の名を呼ぶ声に、漸やく眠りから覚める。私は深い夢の中を漂っていたのだ。夢は次第に薄れて消え極楽から地獄へ再び引き戻された。夜明けの三時だ。外は寒いという。艦は大分北上したらしい。東の空がうすぼんやりと明るくなってきた。私は再度生き返ったことを意識していた。

羅針盤を失なった艦は、盲目航海を続けていた。只管進路を北に向かい進んでいるのだ。敵潜が突然浮上し砲撃してきても、米機に発見されても、「福江」には戦闘用意もなく、海の藻屑と消え去るのみであった。

戦争に武器を持たず、逃げの一手ほどの恐怖が他にあるだろうか。

三月一日に石垣島で米グラマン機の攻撃を受け、中破した「福江」の三日間の航海は、それはながい、ながい死出の旅路に感じられた。三月四日午後、艦は本土と逆の、中国上海方向に進路を誤まっていたのを、たまたま警戒に当たっていた友軍機に見えられた。

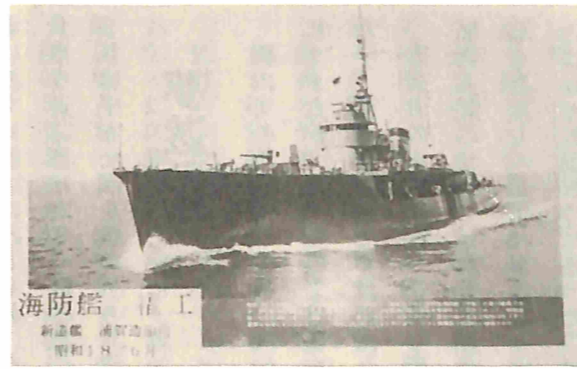
友軍機は翼を振って迎えてくれ「我れに続け」と、その進路を示してくれたとき、乗組員一同「万歳、万歳」と叫び、「これで助かった」と、肩を抱き合い、涙して喜んだ。

その夜、私は佐世保海軍病院に入院、十二日、特設病院船氷川丸へ転院させられた。横須賀野比海軍病院に、二十四日到着したのである。

しかし、この間、三月十七日 硫黄島全軍が玉砕したのである。病院に入って一週間後、連合軍は沖縄島に上陸してきたのである。

この小さな島、沖縄を舞台に、日本と米軍が九〇日に及ぶ激しい激しい闘いが続けられた。日本軍九万三千人、沖縄県民十五万人、約二十五万人の尊い生命が失なわれたのである。

五〇年前、青森県から弘前市の鈴木祐平君、東目屋村の福沢啓三君、私の三人が、海軍少年兵として採用された。そして、鈴木君が、南海で戦死された。鈴木君は、旧弘前商業の二年生であった。彼は野球の選手でもあった。今でもマウンドに立つ彼の人なつこい笑顔が浮んでならない。鈴木君の冥福をお祈りしながら、戦争の悪夢を思い起し綴る。



童謡

凧

日暮遊子

日暮れの 今日も

枯木に 冷たい

だあれが いたずら風が

泣いた 寄って

あの凧 たかって

絵凧 日が暮れる

淋しか

ないか

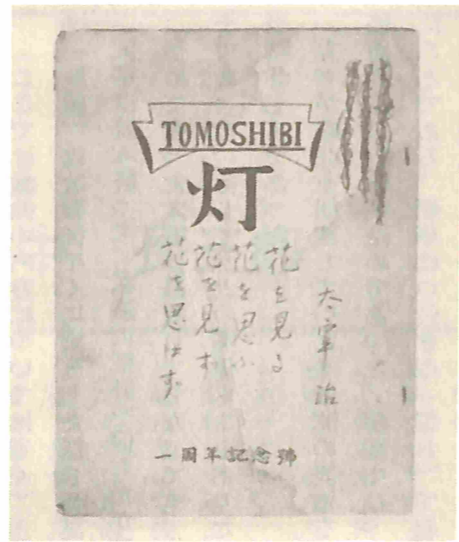
破け凧

絵凧

疎開中の太宰治と

冬の花火

沢田 薫



作家太宰治に戯曲は少い。その少い戯曲を太宰治は金木の生家に疎開中に二編も書いている。即ち「冬の花火」と「春の枯葉」である。

疎開期間は、相馬正一氏の年譜に因れば、太宰治は昭和廿年七月廿八日甲府も焼夷弾攻撃を受け、妻子を伴い東京経由で津軽に向い、米軍機の爆撃による交通網大混乱の折から、東北線、陸羽線、奥羽線、五能線と乗り継ぎ、苦勞の末四昼夜を費して三十一日に金木町の生家に辿り着いた。となつている。八月十五日の敗戦の少し前である。そして廿一年十一月十二日まで金木町の生家にいたことになっている。

その疎開中に早速「河北新報」及び「東奥日報」にも転載して、小説「パンドラの匣」を連載している。

山中正津と私は敗戦後いち早く村の若者に呼びかけ文化の村づくりに着手。同人的な機関紙「灯」を毎月発刊していた。正津自ら、ガリ版印刷編集である。内容は小説、随筆、詩、短歌、俳句等である。号を重ね

るうちに、青森市等他の市町村からの会員も増え、当時は意気軒昂のときであった。

そんな或る日、木立民五郎氏からであった。金木に疎開中の太宰治が、私達嘉瀬の文学好きの人を集めて、東京へ送る前の生原稿を読んで聞かせたいので、その読後評を乞いたいとの報が届いた。批評云々ではない。太宰に会えるという事で私達は欣喜雀躍である。

そこで決定した場所は嘉瀬小学校内の青年学校の校長室。当時の青年学校校長は飯塚貞雄氏。勿論貞雄氏も同席して原稿の朗読を聞くことになる。校長室は旧小学校西側の階段を登って左側の教室（旧尋常高等小学校高等科二年の教室であった。）その何年か後に嘉瀬中学校が建つ。

季節は、太宰治は和服の着流しで来たので初夏の頃であったと思う。集る人、紹介者の木立民五郎、山中正津、鳴海浄、神島みや、沢田薫、校長の飯塚貞雄、あと二、三人は同席していたと思うが、今となっては

その外は思ひ浮かばない。飯塚貞雄氏とは、太宰についてちょっとしたエピソードがあるので紹介したい。彼が退職してマヒの為め不自由な片足を杖に頼って自宅付近を散歩中の朝、農協に勤めに行く私と出会った。

「沢田君!!」

「ハイ、お早ようございます」

「君、僕が青年学校々長の時、校長室で太宰治が自分の原稿、冬の花火を読んで聞かせたことを覚えてるかい」

「ハイ、よく覚えてます」

「それならよろしい」

着流しの太宰治は「戯曲を脱稿したので朗読します。皆さんの批評を仰ぎたい。題は冬の花火です。明日東京の「展望」社へ送る原稿です。」と読み初めた。私は緊張して聞き入った。

(ここでは戯曲の内容については省く)

「展望」は敗戦後早くに創刊した総合雑誌であったと思う。

太宰は読み終って、私達に批評を促したが誰も一言も発し得なかった。初めて会った太宰は鼻目で見なくても、育ちか、気品があり、好男子であった。そして女との関係もさもありなんとした。年譜を見ると当時廿七才であった。

太宰が戯曲を朗読していたその間の表情を最後に記して置きたい。原稿用紙は二〇〇字詰めであった。朗読中ひっきりなしに煙草を吸っていたことである。煙草は口付きの「朝日」で自分で吸っていた煙草が短くなる、まだその煙草の火が消えないうちにその火で新しい煙草に火

を移して吸い続けていた。それに和服の袖から白いハンカチを取り出しては絶えず鼻及び口偏を拭いていた。清潔人であった。

その後、正津氏は私達同人誌「灯」の表紙を飾るため、太宰治より左記の詩を書いてもらい、一周年記念号から終刊号までその詩を表紙として掲載した。

太宰 治

花を見る

花を思ふ

花を見ず

花を思はず

右の大切な直筆の原稿を或る理由で或る人に貸したところ紛失しましたと戻ってこなかった。その事の責任の一端は私にもあったので、正津氏には今もって申訳けないの念がいっぱいである。借りた某女は貴重な借りものを紛失したのではなく自分の所に留めているのではないかと思うこともある。他人のものを持っていても「知る人ぞ知る」と思う外はない。

疎開中の太宰治とは、その後も一、二度会っているが、そのことについては、次号にでも又書いて見たい。

昭和十六年十二月八日、
真珠湾攻撃の九勇士の一人、古野中尉遺作、

「君の為 何か惜まん 若桜 散って甲斐ある 命なりせば」の短歌を口ずさむ日もあります。

昭和二十年三月三日、

川崎市某小学校に私の入隊した日である。

この年は記録的大雪が降り積って津鉄は全面、停止、三月二日よいよ入隊に出発の朝である、空は晴れていた嘉瀬本町十字に、出征兵士の沢田国平、飯塚秀雄、私の三人は見送る人々と別れ、長富留池迄来ると当時留池の中に近道の直進の雪道を造って往來していました。

私達も留池の中の雪道を歩く、今年の大雪を話しながら五所川原に行ける村中の道筋に出られた。

五所川原駅構内に着くと、薄市の成田

藻川乗田、水野から、嘉瀬宇畑中、鳴海勝雄さん妻の弟さんと三人も入隊場所は同じ川崎という事で三人が加わり、賑わいも一段と増して列車内に入る。

入隊の一行は目的地に着くと、いよいよ何処かの外地行きであるぞと話し合い、誰

が言うともなく「沢田、飯塚、山中」三人並んで受付すれば同じ隊にはいれるかも知れぬと、期待し、沢田、飯塚、私の順番に受付した。

結果は、沢田と飯塚の手の掌には、カの文字私の掌にはキの文字が書かれました。

他の初年兵と共に東京大井駅前小学校(校舎の半分兵舎に使用)のもと、教室に入れられ以後三ヶ月間この地で軍人教育を受けた。

翌日、古兵殿に連れられ川崎市某小学校々庭に居ると沢田、飯塚の二人が現われ二人は同じ班に入ったと非常に喜んでいました。

お互に頑張りましょうと言葉を交しながらお別れしたのが最後です。三月十四日東京大空襲により私のいる兵舎は免れたが周囲の町は焼け野原となり、川崎小学校の周囲の防空壕は焼夷弾を受けて班長以下全員焼死し、その中で沢田と飯塚が含まれていました。

昭和二十年八月十五日、

厚木飛行場守備隊陸軍二等兵の私は、高射兵の任務に励んでいました。本土決戦、大号令のもとに、満州、支那大陸より呼び返すの古兵、私より四ヶ月程、後に入隊した初年兵又召集の老兵もあって、さまざまの混合部隊でありました。

日増しに回数が多くなる、敵機F戦闘機、グラマン機の来襲、来襲の無い時は高射砲、監測の訓練、陣地構築で暇はありません。

陸軍参謀等が陣地近くの神社境内に來られるのが、しばしば見かけるようになり、我れ等下級の兵隊の中も、本土決戦近しの噂が流れ始めていた。

昭和二十年八月十五日夜、
敗戦した夜も私達の頭上を、次ぎ次ぎと沖繩戦地に飛び行く若い日

友の戦死

山中 長三郎

本航空隊員の飛行機の響きを、遠く微かな音を聞きながら眠れぬ夜であります。

八月三十日マッカーサー元帥厚木に進駐、後日、我が部隊解散す。思えば五十年前、手の掌に「カ・キ」と書かれた文字は、三人の運命の別れ道でありました。

筆で手の掌に黒く書かれた「カ・キ」の文字を見ながら、三人で話し合った過ぎ去った日を思い沢田・飯塚二人のご冥福をお祈り申し上げます。

「三月十日の東京大空襲である。この日アーチス・E・ルメイ司令官によって行なわれた東京大空襲は、約三〇〇機のB29により、二時間半も長きにわたってつづけられた。

しかも、ルメイは、あらかじめ、長時間燃焼するナバーム性焼夷弾を町の周囲に落とし、炎の壁によって包囲される状態にして、逃げまどう人々の頭上にさらに爆弾を落とすという念の入れ方であった。

このとき落とされた焼夷弾は一七八三トンをおよぶという。
この東京大空襲による死者推定で一〇万人、負傷者四万人におよび、一〇〇万人以上の人が家を失っている。

東京全体の約四割が焦土と化したというのだからすさまじい。」
小和田哲男著から

津軽弁、嘉瀬の小話集

(4) 「アメ」と「アメル」
食物が腐る

金九郎が東京に出稼ぎに来ていた。パンを買ったが、どうも中のアンコが腐っているようなので店員に尋ねた。

「コノパン、アメデネエが」

「アメ(飴)ではありません、パンですよ」

「中味コ、アメデネエが」

「お客さん、パンと言ったでしょう、アメではありません、パンですよ」

「中のアンコ、アメデネエが」

「中にも飴は入っていません、アンパンです」

二人の話は平行線を辿り、物別れになった。

(5) 「親子と夫婦」

久しぶりに町へ買物に出た弥助夫婦、昼間になったので食堂に入った。すると、隣家の多一夫婦も食堂に居て、親子丼を食べていた。

「おめだじ、メイモノ食ってらなあ、おがや、おらども同じ物食うが」

しかし、弥助は親子丼のことを、なんと注文するのかわからなかった。

「隣りの人だち食ってら物と、同じものケロじや」と店員に注文した。

「へバ、二人とも親子でしべ」と店員がいうと、弥助右手を左右に振り

「ナモシ、おらだじ、夫婦だネ」

(木村)

五十年前・その時私は

軍隊に志願した動機

秋元惣之進

半世紀(五十年)前の事を掘り起し記憶をたどり回想、文面の綴りに誤りがあると何卒ご容赦の程を。文永の役から大東亜戦争までの年月だけを、念の為に綴って入れて見た。

私共が幼少の頃、子守をあやして赤ちゃんが泣くと「泣けば山から蒙古くるね」と言うって赤ちゃんをあやした物でした。

太古(大昔)から日本は外敵から侵攻された事が無いと言うが、文永の役(文永十一年)一七四二(今から約七二二年前)元寇忽心烈軍は数隻の船団で日本を侵略せんと攻め寄って来た。

突然の侵攻に日本は右往左往したが、日本は戦力に乏しいながらも必死に防戦、其の間に神の恵みか、仏の恵みか、大暴風雨となり海上は津波の様に荒れ狂って元寇忽心烈軍は命からがら敗走した。

元寇忽心烈軍は何時かは必ず日本に、又、侵攻せんと察知し、国中は一致団結、総力を上げて防戦体制を整えて居ったが、四年後の弘安四年(一二七八)再度、日本を侵略せんと大船団で来襲し、日本は総力を上げて防戦した。

此の時、またもや天の恵みか神の怒りか天空は真暗になり、雷鳴が光

り、大暴風雨となり海上は大時化と化し、元寇船団は命からがら散りばらばらに逃げ敗走したと言う。忽心烈軍は日本は神の国である、日本には二度と侵攻しないと言うたと言うが元寇の軍団の侵攻は二回共も日本では暴風雨の季節の九月から十月だったと言う。

それから六一六(一六六六)年後に国と国との事情もあると思うが日本は日清戦争に入り(明治二七)二八年(一八九四)一八九五(一八九五)

更に日露戦争(明治三七)三八年(一九〇四)日支事変(昭和六年九月十八日)日中戦争(昭和十二年七月七日)一九三七(一九三七)

日本は戦いば必ず勝ち、我が国は神の国であるとして一般国民は信じていた。皇国日本、皇紀二千六〇〇(一九〇〇)年を国民は国あげて祝った(昭和十五年

一九四〇)

勢いづいた日本は真珠湾奇襲攻撃へと走った。(昭和十六年十二月八日)一九四一(一九四一)日本は大東亜戦争へと突入する。戦局は次第に拡大し、ビルマ、フィリピン、マレーシア、蘭印へと日本軍は突入して行った。

当時、日本はラヂオ、新聞等で大本営発表、日本陸海空軍は勝利を治めつつ有り、敵艦隊数十隻撃沈、敵機を数十機激墜したと毎日のように発

表、国民は戦勝に酔い、日の丸の小旗や提灯行列で賑わった。我が嘉瀬村でも村民は日の丸の小旗や提灯行列を村の隅から隅まで、声い高らかに萬歳を参唱しながら最後は村社八幡宮に必勝の祈願をした。

当時、村人達は戦勝にあやかり乏しいながらも嘉瀬八幡宮に旧正の元日に必勝を祈念し石造物を献納寄進した。

時代は明治から富国強兵制を取ったが戦時色は日一日と濃くなり嘉瀬からも若い青壮年に赤紙一枚の召集令状が発令され、嘉瀬駅からも次々と出征兵士が送られた。又、農耕馬にも召集令状の赤紙が発令され、二足三文に農耕馬が徴集された。

農家の人々は、田圃や畠仕事は老人と婦女子で耕作される様になり、田仕事の遅れて居る家には隣組同志の人々が応援に駆けつけ、助け合ったが生産した米は強権発動で飯米さえも残さず無理に政府に供出させられた。

生産農家は（国民も）飯米や生活必需品、其の他の物すべてが切符による配給制度となり不自由した。それでも国民や農家の人々は腹一杯ご飯も喰われずに日夜、辛苦の労働に耐えて、戦争に勝ちまではと細々と暮らした。

当時、私は嘉瀬国民学校を出た頃、嘉瀬に愛郷会と云う郷土を愛する「会」が有り、会員十二三人で組織されて居ったが、週に一回位、夜に村役場に集り、郷土の為に活躍した。会長の木立民五郎さんは二九歳の若さで嘉瀬の村長だった。愛郷会の例会が終つてからの木立民五郎さんの戦局情報を聞くのが私の楽しみだった。

或る晩の事である、木立民五郎さんは「これからの若い青年はどうせ軍隊に取られるのだから、一日でも早く軍隊に入隊すると後から入って

軍服を知らん振りして盗んだ。故郷に居る時に軍隊は要領を本分とすべしと軍人勅諭の五ヶ條に書かれてあったのを思い出している出来事だった。私が私から軍服を盗まれた新兵は、下士官に報告すると下士官は其の新兵を今から其の様ではどうする、と怒鳴られた。

人の嫌がる軍隊に志願する馬鹿もあると言うが、私は軍隊ほど良い所は無いと思つた。昼は高射砲の練習だが身体は「らく」で自分の「砲土」の所を一通り覚えるてしまうと後は簡単で、朝は七時起床し、午前十時には十分の休憩、昼は一時間の休憩、午後は三時に十分の休憩、午後五時には高射砲の練習終りでその後は自由時間で夜は八時に消燈、農家育ちの私は晩の八時から朝の七時迄は寝飽きた。

朝、昼、晩と三食共、毎日、肉や魚の珍らしい料理で鱒などは「猫股」と言つて猫も喰べないで股いて行くと行つて唯れ一人喰べなかつた。

給料は一ヶ月七円五十銭（米一俵七円五十銭）で、誉れの煙草はただ同様だった。酒は配給、たまには宴会、慰問袋が貰える。時々慰問団や奉仕団がくる。

私共の中隊は関東地区に「秋山隊有り」と有名だった。秋山隊長は朝の「訓示」に必ず古年兵に新兵を殴ったり叱つたりしてはいけないと朝礼で語り「兵隊」を可愛がった。又、成績が悪く機転の回らない古年兵や新兵は即座に他の隊に転属させられたが、新兵で秋山隊に残されたのは一緒に入隊した私と群馬県の柿崎新兵と二人だけだった。

戦争は毎日に激しくなりB29が日本本土を空襲する様になりB29は私共の居る江戸川から入つて時々、東京を空襲する様になった。高射砲弾は敵機に当たらないと一般的に言うが秋山隊の高射砲は当時、九

くる新兵より古参になるのだから有利だよ、と言うた事があつた。」

又、嘉瀬青年学校の夜学で今清一先生（後に嘉瀬小学校長）は時々、銃剣術の指導やら戦局情報を知らせた。途中に「人間はどうせ、一生に一度は必ず死ぬのだ、こんな片田舎で死んでも誰一人墓参りに来て線香を上げて両手を合せ拜んでくれる人はいない、それよりも軍隊で名誉の戦死をする立派な大鳥居が有る靖国神社に神として祀られ年中、全国の人々が毎日毎日、両手を合わせて拜んでくれるのだ」と言うた。

純心な若い気持の私は、なる程、木立民五郎さんや今清一先生の話を通じて真に受けて軍隊に志願する決意を心に決めて「軍人勅諭五ヶ條」を軍隊に入る前に暗記しようと思つた。日夜勉強し、あの長い五ヶ條を徴兵検査までにはせめて「前文」だけでも暗記しようと努力した。その甲斐あつて徴兵検査までには「五ヶ條の前文」を見事暗記、覚えてしまった。

私が徴兵検査志願の時は「満」の拾七才〇数え年の拾九才の時であつた。徴兵検査には見事合格した

昭和十九年（一九四四）と記憶するが、私より上級生の一級生と二級生の上級生が同時に徴兵検査を受けた。一級生と二級生の人達より私が一番先に出征した。木立民五郎村長をはじめ村人達が嘉瀬駅が埋まる程の多くの見送りがあつた。

私は東京江戸川の高射砲隊に入隊、入隊と同時に中隊では普段着の軍服と新品の外出用の軍服と二着渡された。

私は新品の外出用の軍服を自分の棚の上にあけて居ると、今日入隊した少年兵全員、営庭に呼集の命令が有り、早速、営庭に出て点呼を取り兵舎に帰つたところ、自分の新品の外出用の軍服が無い、私は直感的に古年兵が盗んだものと思ひ込み、早速、私も隣りの新兵の新品の外出用の

九式の最新鋭の高射砲だった。敵機が日本本土を空襲にすると電波探知機で発見し、敵機の高高度、高速、航路角度が探知機より送られて、発射する。秋山隊は敵機を命中させ、度々打ち落したが、命中された敵機から米飛行士、又、米国婦人飛行士等が落下傘で降下するのを数回見た事がある。習日の新聞に降下した落下傘の飛行士を捕虜にしたとのラヂオや新聞記事で度々見た事があつた。其の度に菊の紋章が付いた恩賜の酒や恩賜の煙草を戴いた。

B29は毎日毎晩の様に編隊飛行で来襲し焼夷弾や爆弾を東京近郊に投下するので東京近郊は焼野原と化した。

その内、艦載機から飛んでくる「カーチスSB2C」や「グラマン」の飛来が底空飛行で夜となく昼と無く続く機銃射撃で死屍は山の様だった。

或る日の午前十時頃、私と群馬県の柿崎と二人で中隊長室に呼ばれ、「秋元、柿崎、お前達二人は志願兵だったな。志願兵だったら下士官候補に志願したまい。」と言われた。私共二人は早速「ハイ」と返事をした。

其れから四〇五日、中隊で下士官候補の予備知識の勉強をして居ると中隊長から「大隊本部で下士官候補の試験が明日あるから伊藤伍長（秋田県出身）に引率されて行つて来いとこの命令でした。

翌日、大隊本部に着き試験官から学科の試験用紙が出された。試験用紙には「硯箱」「黒汁」「筆」其の他の問答が記載されて居った。

学科試験には私も柿崎も「パス」した。次は口頭試問である。試験官は「秋元、お前は何故、志願して来たのか、」私は即座に「ハイ」天皇と国家の爲の捨石になる覚悟ですと言つた。次に試験官は軍人勅諭を言ひ給ひと言つたので、故郷で軍人勅諭の前文だけは暗記して居つたので